池田自然史博物館

◆ 冬 鳥 ◆

例年、10月から11月になると、淀川の河川敷には冬場を平野部や河川の中・下流域で過ごす、いわゆる「冬鳥」がやってきます。南方や大陸から渡ってくるガン・カモ類などの「水鳥」は当然河川をエサ場としても利用していますが、広大な開水面を有する大河川の下流域を越冬場所として利用し、大きな群れで休息をしています。採餌の際には、群れでエサ場の他の水域に大移動をして、その後また戻ってくるということを、冬の間中繰り返します。

一方、大陸から移動してきたり、国内の山間部から里に下りてきて、河川敷の草原や樹林帯で群れではなく分散して縄張りを形成する「陸鳥」も存在します。これらの鳥たちは、休息場としての利用というよりも、冬の間中ずっとその場に留まり生活の場とするために、河川の植生や生息する小動物たちとは密接な係わり合いがあります。

小型の猛禽類とも呼べる『モズ』は、草むらや林の中で昆虫やカエルなどの小動物を捕食します。中型の『ツグミ』は、主に地面で昆虫や草の種子を食べ、『アオジ』や雄・雌で羽の色・模様が顕著に異なる『ジョウビタキ』や『ベニマシコ』は、ノイバラなどの赤い実やイネ科の種子をついばみます。

冬場の河川敷では、『スズメ』や『ヒヨドリ』といった「留鳥」と呼ばれる年中その場に生息する鳥もいるわけで、淀川は、「留鳥」に加えて「冬鳥」の餌・生息をも支える多様な環境条件が整っているということになります。冬の淀川はまさに野鳥天国となります。ぜひ双眼鏡を持って出掛けてみてください。「えっ、身近にこんな鳥が！」という思わぬ出会いに恵まれることに違いありません。


●モズ


●ジョウビタキ（♂）


●ベニマシコ（♂）


●アオジ

環境省　環境カウンセラー
NPO法人　nature works

池田　哲哉

来た・見た・聞いた 淀川雑記帳

夏が居残っていた10月、空が高く感じる11月、下流域をぶらぶらと歩いてみた。平日だったので利用客は少ないが、ランニングしている人は意外と多い。男女のカップルで走っているのは、定年退職後のご夫婦だろうか。若い女性もカラフルなウェアで、タイムを計りつつジョギング。海老江地区にはラグビー場があるせいか、屈強そうな男性もちらほら。エグザイル並みの体脂肪なのだろう。対岸の西中島地区は大きなBBQ広場が広がる。ゴミ回収・処分のため有料化されたが、休日ともなるとお祭り会場のように人が集まる。犬の散歩、野球を楽しむ人々。さまざまな河川利用で市民に憩いのひとときを提供している。両岸ともゴミはほとんど見かけない。ルールとマナーを守って、みんなの都会のオアシスを維持したいものだ。（編集長・石山郁慧）

川と人　人と人を結ぶ
河川レンジャー 淀川管内
VER RANGER

デザイン監修：NPO法人nature works　泉野幸彦・ありさだあきよ
イラスト監修：NPO法人nature works　小村一也
取 材 協 力 ：人を自然に近づける川いい会
発 行 支 援 ：国土交通省 淀川河川事務所

バックナンバーは、http://npo-natureworks.net/　の「無料の資料」からダウンロードできます。

淀川自然画報
2016年11月号
No.22
淀川水系の生物多様性を
見る・知る・楽しむ
生きものシグナル
YODOGAWA SHIZEN GAHO

水辺の博物誌



いつも尾を振る水辺の愛嬌者

キセキレイ　*Motacilla cinerea*

淀川支流の山間部、渓流で夏場に姿を見かけるキセキレイ。その名のとおり腹部の黄色が目立ち、セグロセキレイやハクセキレイと、明確に見分けられます。冬場には市街地でもまれに見かけることがありますが、他のセキレイが比較的人が近づいても平然としているのに比べて、キセキレイは警戒心が強く、なかなか近づかせてくれません。いつも尾を上下に動かす愛嬌のある姿から、「石たたき」「庭たたき」とも呼ばれています。（画 / 森本宏美）

発行責任者　淀川管内河川レンジャー・石山郁慧

under the water

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史

淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

ニゴイ

Hemibarbus barbus

本種はコイ目コイ科カマツカ亜科の仲間です。分布は、国内では本州、四国の瀬戸内側、九州北部などに自然分布し、国外では中国大陸、朝鮮半島、台湾、海南島で知られています。近年、このニゴイは、従来のニゴイとコウライニゴイ(Hemibarbus labeo)の2種に細分類されました。コウライニゴイは口の周辺の皮弁がニゴイよりも発達していますが、幼魚期の個体は未発達で、一般的にこの2種の判別は難しいです。



顔が細長いのでコイと見分けられる

河川の中・下流や汽水域、湖沼や池などの砂底に生息し、体長は最大で50cmほどに達します。繁殖期は春から初夏の時期で、この時期のオスは全身が黒っぽくなり、口の周辺には追星という白い突起物がみられます。産卵は、降雨後、群れで砂礫底などに穴を掘って行われます。口には1対のひげがあり、食性は雑食性で、付着藻類のほか、ユスリカの幼虫やカゲロウ・トビケラ類などの水生昆虫、成魚になると小魚なども食べます。コイに似ていることからニゴイと呼ばれるようになったそうですが、ニゴイの体は細長く、尾びれの切れ込みも深く、鼻先が前に突き出ていて吻が長いので、「キツネゴイ」の名前で呼ばれる地域もあります。地域によっては食用にされますが、小骨が多いので天ぷらや唐揚げなどにされます。水質汚濁や富栄養化に強く、最近は各地で増えています。ルアーフィッシングの対象魚として人気が出ていますが、アユを食害することもあり、釣り人によっては敬遠されています。



花想鳥感

四季折々、水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館　主任学芸員
高田 みちよ

河川公園のツグミ

ツグミという鳥をご存じでしょうか。今は法律で野鳥を捕って食べることは禁止されていますが、ほんの数十年前には大量のツグミがカスミ網で捕られ、ヤキトリとして食べられていました。とくに信州では「ツグミを食べないと冬が来た気がしない」と、採集が禁止された後も長い間密猟が続いていたとも言われています。

ツグミは本州では冬鳥です。シベリアなどロシア北東部で繁殖し、秋になると日本に渡ってきます。「クワッ」「クイッ」という独特の声で鳴く、茶色のマダラ模様の地味な鳥です。渡ってきた当初は山地で木の実などを食べていますが、徐々に畑、水田、川原などの平地にやってきます。ちょっと木のある公園や庭などにも来るので、みなさんもきっと見たことがあるはず。淀川では木の枝にとまっていたり、芝生を歩いていたりと、冬になるとごく普通にみられます。地面を歩くツグミはとても特徴的で、スクっと立っているかと思うと、突然トタタタと歩き、またスクっと立ちどまることを繰り返します。まるで「だるまさんが転んだ」をやっているようです。時々地面をほじくってミミズや昆虫などを探しているようです。そして3月～4月になると徐々に北へ渡り始め、5月にはいなくなります。





the waterside

the sky & land

the worst 100

水辺の虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

人を自然に近づける川いい会　捕獲番長 川島 大助

イシマキガイ

淀川の淡水域でみられる巻貝はイシマキガイとカワニナ類、タニシ類がいます。カワニナ類やタニシ類は生涯を淡水で過ごしますが、今回ご紹介するイシマキガイは海と川を行き来する回遊性の巻貝です。

成貝の殻長は25mm程度で、殻頂部がカルシウムイオンに乏しい河川水によって侵蝕され欠けています。殻上面は緑褐色の殻皮に覆われて細かい三角形の斑紋が並びます。春から夏に交尾して、メスは礫等にドーム状の卵嚢を産み付けます。孵化した幼生（ベリジャー幼生）は海へ流下し、植物プランクトンを摂餌しながら浮遊生活を送ります。幼生は汽水域で着底、変体して幼貝になります。幼貝は礫の表面を匍匐し、付着藻類等の微生物が形成するバイオフィルムを歯舌で削り取って摂餌しながら、徐々に汽水域～淡水域へと遡上し、成貝になります。

本種は、淀川では淀川大堰よりも下流の礫帯でごく普通に見られますが、河川改修などの影響で個体数が減少するケースもあり、大阪府レッドデータブックでは「要注目種」となっています。また、水質指標の生物（水質階級Ⅱ=ややきれいな水域）にもなっています。さらに、イシマキガイは観賞魚水槽等では「コケとり掃除屋」としても重宝し、市販もされていますが、ぜひフィールドで採集して水槽を掃除する様子などを観察してみてください！

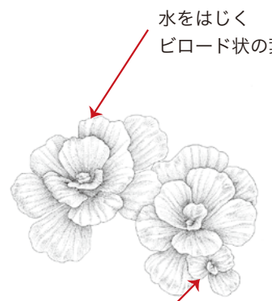


水槽のガラス面では食べている姿が観察しやすい



侵略的外来生物

淀川ワースト100



AN INVADER

サトイモ科　**ボタンウキクサ**

Pistia stratiotes

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



原産地は南アフリカ。多年生の浮遊植物。「ウォーターレタス」という名前でホームセンターで大量に販売され、各地で繁殖した。レタスのような姿であるが、食べられない。在来種やイネと競合するだけでなく、過繁殖による水中への酸素・光の供給不足を招き、水質の悪化及び水生生物へ悪影響を与える。寒さに弱いことから冬には枯れていたが、淀川の一部では工場などの温かい排水が流れ込み越冬していた。その場所を駆除することで繁殖を抑制できたが、まだ見かけることがあるので、新たな越冬地があるのかもしれない。今年6月、国の許可を得ず自宅で栽培していた静岡県の会社員が警視庁に逮捕されたそうだ。



●3年前に庭窪ワンドで見つけたもの。冬だというのに、まだ青々としていた。

